

## 緑のダム

残雪を抱いた燧ヶ岳を背景に尾瀬ヶ原はいまを盛りに白い水芭蕉の花が一面に咲き誇っている。朽ちた植物が数千年にわたって積み重なってできた泥炭層に、ふかふかなスポンジのような湿原の植物が乗ってダムのごとき水を湛えている。三条が滝に流れ落ちた水は奥只見から阿賀野川の豊かな流れとなって水田を潤し日本海へと注ぐ。

上高地の梓川の清流も、北アルプスの深い森に埋め尽くされた源頭部があつてこそ絶えぬ流れとなる。世界遺産の白神山道を覆うブナの原生林は、落ち葉の腐葉土層に搾ればジュッと水がしたり落ちるほどで裸地の三十倍もの帯水能力をもっている。山の森が緑のダムとなって水を小出しにしてくれているので、渇水の季節でも清流が絶えない。日本列島で降る雨は年間平均でおよそ千八百ミリ、全体で七千億トンほどになる勘定だ。降都市用水として使われているのは、に降った雨の二割足らずが過ぎない。山の木々の緑の保水ダムがあつてこそ、絶えない水の

流れの恩恵を受けていることになる。その緑のダムも自然破壊とともに減る。一方で、空梅雨など自然からのしっぺ返しに弱き露見してしまった。

雨がほとんど降らない砂漠ですら、極限の状態でも巧みな知恵で多くの生きものが生きのびている。根を張らずに空気中の水分を捕えるティランジアという風まかせの植物がいるし、かすかな朝露を水の糧としている小動物もいる。

乾燥したオーストラリア大陸には、自らの腹を数十倍にも膨らませて水を蓄え、おなかのダムで仲間を飢えから守っているアリすらいる。過酷な自然に対して小さな生きものが、一滴の水も逃さないように知恵をしぼっているのに人間界では無駄使いが多い。

いまや海辺の漁師も山に植林をして、漁場の豊かさの再生を自然の循環に求める時代である。初心に返って自然のもつ巧みさと知恵に、もっと身をゆだねていいのではなからうか。